令和7年度 入学試験出題意図

教科・科目名	英語、中国語、琉球語	問題番号	問題1, 問題2
対象学部・ 学科・課程等	大学院芸術文化学研究科 (比較芸術学・民族音楽学・芸術表現 各研究領域)		
出題意図	<p>芸術文化学研究科で研究するために必要な基礎能力を問うとともに、理解した内容を現代日本語の文法や表現法に沿って論理的に表現する力を問うものである。ただし、専門的知識の有無そのものを問うものではない。</p> <p>問題1は、テキストは造形芸術を学ぶものにとってきわめて重要なモチーフである「人体」の、とりわけ「ヌード」という概念が西洋美術史の中でどのように変遷したかを論じる名著からの抜粋である。文法的にはさして難しくない文章であるが、正確に内容を把握できているかを見ることで、造形芸術に関する概念的、歴史的考察を習慣的に行っているか、適切な用語を選べるかなどを判断する。</p> <p>問題2は、音楽、技術、文化がどのように関わっているかを論じた著書のうち、1980年代初頭におけるデジタル革命による音楽の影響について書かれた章の冒頭部分である。親しみやすい内容をアカデミックな文体を使って記述した文章である。出題部分の翻訳により、芸術文化分野で英語論文を読むための文法や構文の理解力、読解力を判断するとともに、日本語として整合性のある翻訳ができていているかを評価する。</p>		

令和7年度 入学試験出題意図

教科・科目名	英語、 <u>中国語</u> 、琉球語	問題番号	問題1，問題2
対象学部・ 学科・課程等	大学院芸術文化学研究科（比較芸術学・民族音楽学・芸術表現 各研究領域）		
出題意図	<p>外国語の出題は、沖縄県立芸術大学芸術文化学研究科で研究するために必要な基礎的な能力を問うとともに、理解した内容を現代日本語の文法や表記法に沿って論理的に表現する力を問うものである。</p> <p>問題1の前近代の琉球において作られた漢文を適切に理解し、日本語に訳すことができるかを問う。出典は、課題文1は那覇市歴史博物館所蔵『球陽 卷之十』（794号記事）、課題文2は沖縄県教育庁文化財課史料編集班（編）『歴代寶案 校訂本第15冊』沖縄県教育委員会、2016年、62頁（『歴代寶案』第3集 3巻16号文書の一部抜粋）。</p> <p>問題2の中国と琉球に関する研究論文（繁体字）を適切に理解し、日本語に訳す、または要点をつかみ適切な日本語でまとめることができるかを問う。出典は、上里賢一「華夷秩序與琉球的自我認識」『第十回琉球・中国交渉史に関するシンポジウム論文集』沖縄県教育委員会、2014年、173頁（一部抜粋）。</p>		

令和7年度 入学試験出題意図

教科・科目名	英語、中国語、 琉球語	問題番号	問題1，問題2
対象学部・ 学科・課程等	大学院芸術文化学研究科（比較芸術学・民族音楽学・芸術表現 各研究領域）		
出題意図	<p>琉球語試験については、入学後、琉球文献などを読み、理解するために基礎となる琉球語能力が身についているかどうかを測定する。</p> <p>琉歌組踊語に用いられる琉球語は、多くの琉球文芸作品に通ずる基礎的な言語である。回答者の理解度で琉球語資料の読みと理解度を測ることができる。</p> <p>具体的には問題1と問題2の2問構成である。問題1は古文書購読である。明治以前の琉球関係資料の多くは未だに翻刻されていないものが多い。従って古文書購読のスキルは博士論文における琉球資料を活用する際に必須のものとなる。また、琉球文書内には候文体であっても名詞や一部語彙に琉球語が用いられることが多い。琉球語は平仮名で記載されることが多いため、平仮名の多い古文書を用いた。</p> <p>問題2は、南島歌謡の読み、通釈について基礎的な知識を問うものと、歌謡に用いられる言葉を理解していなければ解けない歌の構造（これは基本的なもの）、および解説を行う問題である。琉歌組踊語と時代区分の異なる（より古い）琉球語の読解能力を測る問題である。</p>		